

新学習指導要領を踏まえた指導のあり方(4) — どのような状況下でも生徒の主体的な学びを支える「変わらないこと」 —

英語科 肥沼 則明 植野 伸子
中島真紀子 栖原 昂

1. はじめに

(1) 新学習指導要領について

2021(令和3)年4月より施行される新学習指導要領には、育成を目指す資質・能力の3つの柱として「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」が示されている。また、外国語科の目標には「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」が新たに組み込まれ、指導の方向性として「主体的・対話的で深い学び」を目指すように謳われている。さらに、現行の高等学校指導要領と同様に、中学校でも具体的な指導法として、「授業は英語で行うことを基本とする」ということが求められている。

一見するとこれらはまったく新しいことのように見えるが、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』(文部科学省, 2017)をよく読むと、改訂の基本方針の根底に流れていることは決して新しいことではなく、むしろこれまでも大切だとされながら、なかなか教育現場で実行されてこなかったことを、新たな切り口から説明しようとしているのだということがわかる。したがって、まずは学習指導要領をしっかりと読み込み、学習指導を行う上で大切にすべきことは何であるかを改めて理解する必要がある。

(2) 本校英語科のこれまでの歩み

本校英語科は、その前身である東京高等師範学校附属中学校時代の1910(明治43)年には既に、英語を英語のまま理解するには音声中心の訓練から始めることや、英語の授業はできる限り英語で行うこと等を、現在の指導計画にあたる『教授細目』(東京高等師範学校附属中学校, 1910)に定めて授業を行っていた。さらに、1923(大正12)年にH. E. Palmerが同校を氏の提唱するOral Methodの実践校としてからは、同指導法に則った形で「聞くこと」「話すこと」を中心としたその指導法を脈々と受け継いできた。もちろん、その伝統に甘んじることなく、時代の変化を見定めながら、目の前にいる生徒の実態に合った指導法を確立すべく新たな取り組みもしてきている。そして、現場の指導者として本当に必要なことは何かということに重点を置いた研究を進め、その成果を以下のように研究協議会で発表してきた。

- 平成8～11年度…「育てたい生徒像」を設定し、「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動の3年間の指導計画を作成した。
- 平成12～15年度…「自立した学習者」を育てるための4つの要素を相補関係を持たせて指導することの重要性とその具体的指導内容を提案した。
- 平成16～18年度…入門期指導のあり方と具体的な指導内容を提案した。
- 平成19年度……小中連携と中高連携を意識した中学校の具体的指導事項を提案した。
- 平成20～24年度…「新学習指導要領に対応した授業作りの工夫」をテーマに、技能統合的な活動の例、カリキュラム編成上の課題、新しい教科書への対応、小中連携を考えた入門期指導の実践例などを提案した。
- 平成25年度……「意味を伝える音声指導」をテーマに、授業における様々な工夫や具体的な指導内容を提案した。

- 平成 26 年度……「『読める』生徒を育成する系統的指導」をテーマに、生徒が最終的に長文をスラスラと読めるようになるための指導内容を提案した。
- 平成 27 年度……「確かな英語力を身につける学習者の育成」をテーマに、主体的に学習する生徒を育てる指導のあり方を提案した。
- 平成 28 年度……「『授業は英語で行う』ことの基本と留意点」をテーマに、授業を英語で進めるための基本的な考えと具体的な方法を提案した。
- 平成 29～令和元年度…「新学習指導要領を踏まえた指導のあり方」として、授業を実際のコミュニケーションの場面にする方策や「主体的・対話的で深い学び」をする生徒を育成する方法、そして、その中であっても変わらないこと・変えてきたこと・変えていくことを提案した。

このように、本校英語科は学習指導要領改訂の前後数年間は改訂のポイントに焦点をあてて本校がそれにどのように対応しようとしているか・してきたかを提案する一方、それ以外の年は英語教育において恒久的に追究されるべき内容を中心に提案してきた。そして、それらの考え方のもとに英語科教員全員が最終的に「育てたい生徒像」に関して共通理解をもち、誰が、いつ、どの学年の、どのクラスを担当しようとも、生徒が戸惑わないような指導を心がけながら日々の学習指導を行ってきている。

なお、直近数年分の発表要項の内容は、私設ホームページ『次世代を担う先生方のための英語学習指導』（肥沼、2019）において PDF ファイルで読むことができるので、関心を持たれた方は参照されたい。

2. コロナ禍での学習指導

今年 2 月末に新型コロナウイルス感染症拡大防止の目的で全国の小中高に出された一斉の休校要請は、学校現場を前代未聞の大混乱に陥れた。生徒が学校に登校してこない状況で、いかに彼らの学びを保障するか、各校はその対応に追われた。

多くの学校がそうであったように、本校も 3 月始めの臨時休校開始直後は、生徒が家庭で自習できるような課題をプリントなどで課していた。並行して研究部を中心に様々な学習支援の方法を検討し、各家庭のインターネット接続環境の調査も行った。最終的に学習支援クラウドである「ロイロノート・スクール」（以下ロイロ、またはロイロノート）を中心に用いた学習指導を行うことになり、新年度 4 月からの各教科や学級・学年活動での試験的な運用を経て、5 月の連休明けから本格的な活用が始まった。（詳細は 5. 参照）

5 月末に緊急事態が解除されてからは、6 月に学年別、7 月に各組を 2 班に分けた班別の分散登校が始まったが、授業時間は通常よりも大幅に縮小されていたため、ロイロを用いた学習支援も継続して行った。6 月中は学年別分散登校、すなわち各生徒にとっては 3 日に一度の登校であり、ロイロでの学習を中心としつつ、授業では学校でだからこそできる活動や、ロイロの学習内容を確認する活動などを主に行った。通常の定期考査を実施できない代替措置として、6 月末(教科によっては 7 月末)に「確認テスト」を実施し、ロイロを用いた家庭学習の定着度を確認した。

不足する授業時数を補うため、夏季休業は例年より 3 週間短縮した。8 月末からは念願の一斉登校となり、1 コマ 40 分の短縮授業ながら、通常時間割での授業を再開した。授業時間は 10 月からは 45 分となり、現在に至っている(図 1)。

3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月
休校			学年別分散登校	班別分散登校	夏休み	一斉登校(40分授業)	一斉登校(45分授業)	
紙媒体による課題提示	学習支援クラウド	学習支援クラウド+対面授業		対面授業+必要に応じて学習支援クラウド				

図 1 学習指導形態の変遷

3. テーマ設定の理由

中学校の新学習指導要領が来年4月より完全実施されるのに伴い、本校では過去3年間、「新学習指導要領を踏まえた指導のあり方」をテーマに研究を行ってきた(筑波大学附属中学校, 2017; 同 2018; 同 2019)。昨年度は、「変わらないこと, 変えてきたこと, 変えていくこと」というサブテーマを掲げ、本校英語科の過去・現在・未来を考察し、主に「変わらないこと」に焦点を当てた発表を行った。当初、今年度も同様のテーマで「変えてきたこと」を中心に研究を続けることを予定していた。実際は2. で述べたように臨時休校や分散登校を余儀なくされたが、一方でこの特殊な状況への対応を強いられたからこそ、本校英語科が大切にしていることは何か、またこのような状況下でも生徒が主体的に学び続けるためには通常何を指導しておくべきか、といったことが改めて鮮明に見えてきた。よって、今年度も同じテーマを引き継ぎ、敢えて昨年度同様、「変わらないこと」に焦点を当て、研究を深めることにした。主な理由を以下に述べる。

(1) 準備の苦悩の観点から

3月始めからの休校開始に伴い、英語科ではまず第3学年を中心に、様々な試行タスクを生徒に課し、文字データだけでなく音声・画像・動画形式の教材も配信できること、また生徒たちが文字・画像・音声など様々な形式でのデータを提出できることを確認した。質問やトラブルには個別メッセージ機能や電話などで対応し、クラウドでの学習支援が本格的に始まる前に、生徒・教員双方が確実にロイロを用いて学習活動を行える環境を確保した。

ロイロの動作確認と並行して英語科を悩ませたのは、ロイロノートを用いてどのように学習指導を行うかであった。同時双方向の授業が行えるZoomなどのビデオ会議システムと違い、ロイロでの学習は、いつ、何を、どれだけ学ぶかを各自が好きに決められるオンデマンド形式である。すなわち、授業のように生徒と実際の話し言葉でやりとりをするのは不可能であり、本校の英語科指導の100年以上の長きに渡る伝統である、「聞くこと」「話すこと」を中心にした英語による授業が行えないという現実に、全員が苦悩した。

様々な悩みながらも、最終的には英語科としての方向性を共有しながらクラウドでの指導を行えるようになった(詳細は4. と5. を参照)。これは、「時代が変わっても本校の英語科で脈々と受け継がれ、現在でも英語を教える上で全員が大切にしている原則」(同 2019, p. 103)、例えば、何を優先すべきか、何を大切にして教材を作るか、どのような指導手順を踏むかなどの根本的な価値観を全員が共有していたからであり、「変わらないこと」として、昨年度の研究で言語化し、まとめておいたことが大いに役立った。今回のコロナ禍のように、これまでの「普通」が通用しないような状況であっても、我々を変わずに支えてくれたのが「変わらないこと」であるならば、その「変わらないこと」がどのようにこの困難を支えたのかをふり返り、分析しておくことは、大変意義深いことであり、今後のより良い指導・実践にもつながるであろう。

(2) コロナ禍での学習指導の過程で気づいたことから

(1)で述べたように、「変わらないこと」のおかげで、英語科として一致団結してこの困難な状況に取り組むことができた一方で、生徒が学習支援クラウドを用いて主体的な学習を行うためには、普段どのような指導を行っておくべきだったかということも浮き彫りになってきた。5月末に緊急事態が解除され、6月に分散登校での授業が少しずつ始まり、オンラインでしか接していなかった生徒たちと直接顔を合わせるようになった。そこで気づいたことは、例年に比べて学習の定着度に大きなばらつきがあること、特に1年生でそれが顕著なことだった。上級生に比べ1年生は、学校での授業や諸活動などから得られる様々な経験や学びの積み重ねがないことが原因であると考えられ、オンライン学習のように、制限のある中での学習活動を有効に機能させるためには、日々の授業で何をしておくべきだったかを、改めて実感させられた。その気づきをこれまでの本校の実践と合わせて深く掘り下げてみることは、新たな「変わらないこと, 変えてきたこと, 変えていくこと」につながるはずである。

(1)(2)で述べたように、今年度の学習支援クラウドを用いた取り組みを分析し、これまでの本校の実践と照ら

し合わせることは、まさに「本校英語科の歴史を紐解き、過去に学び、現在の状況を見極め、未来のあるべき姿を考察」(同 2019, p. 103)することであり、昨年度までの研究を引き継ぎ、さらに今後の英語科の実践につながる研究に十分なりうると判断するに至った。よって、「新学習指導要領を踏まえた指導のあり方(4)―どのような状況下でも生徒の主体的な学びを支える『変わらないこと』―」を本年度の研究発表テーマとして取り上げ、議論を進めることにした。

4. コロナ禍での学習指導を支えた理念とこれまでの実践

今年度の臨時休校や分散登校などのコロナ禍での学習指導においても、本校の英語科はチームとして向き合い、英語科としてどの学年も共通の取り組みを行った。そして、その際には本校の英語科が時代を問わず持ち続けてきた理念と、学年や担当者を問わず共通して行ってきたこれまでの実践が、「変わらないこと」として大きな支えとなったことは前述の通りである。

本章では本校英語科が大切にしてきた「変わらないこと」を振り返るとともに、コロナ禍での学習指導においても「抛りどころ」となり、その重要性を再確認することとなった共通理念と具体的な実践についてまとめたい。

(1) 本校の英語科で大切にしてきた理念

昨年度の研究協議会では、授業を行う上で本校の英語科が長年にわたって大切にしてきたことを、過去の文献や現在の実践を振り返りながら次のような項目にまとめた。

- ①「英語の授業は英語で」を原則とする
 - ②「聞くこと」「話すこと」を中心に音声を重視した指導を行う(「聞くこと→話すこと→読むこと→書くこと」)
 - ③生徒の気づきや思考を重視した帰納的な導入を行う(Oral Introduction/Interaction)
 - ④基礎基本を徹底し定着を図る
 - ⑤音読を重視する
 - ⑥文字と音を関連づけて指導する
 - ⑦家庭学習は「復習」を中心とする
 - ⑧教科書使用前の「入門期指導」を十分に行う
- (筑波大学附属中学校, 2019)

ここに挙げた項目は本校で100年以上にわたって共有されてきたことを項目化したものである。実際にはこれ以外にも現在の英語科で共有されていることはあるが、上記のような項目は特に過去の歴史というだけでなく、現在の本校英語科でも変わらず共通認識となっている。今回のコロナ禍での休校や分散登校においてどのような指導・支援を行うべきかについても、このような理念や「何を大切にしなければいけないか」という共通認識があったからこそ、それが抛りどころとなり、担当学年に関わらず、3学年を通して全ての取り組みについて全員で提案・協議することができた。

(2) 本校の英語科が変わらずに行ってきた実践

今回のコロナ禍での学習指導を考える上で、(1)で挙げた理念だけでなく、これまで本校の英語科が行ってきた具体的な実践も「抛りどころ」となった。どの学年でも共通して行ってきた取り組みがあったからこそ、教員間でも今回の指導のイメージを共有することができた。

また、教員がどれだけ一枚岩で指導・支援にあたらうとしたとしても、学習する主体である生徒が英語を学習する上で何が大切なのかを理解できていなかったり、教員の指示の意図を正しく理解できていなかったりすれば、休校中の遠隔学習支援や分散登校による限られた時間・時数での授業で十分な学びを得ることは難しい。すなわち、教員と生徒が何を共有できているかが重要なのである。そういう意味でも、これまでどのような実践を行い、

生徒と何を共有してきたかをまとめることは大きな意味を持つと言える。

①英語学習における「学習観」の共有

本校では入学した中学1年生に、英語学習の目的や英語を学習する上で何を大切にしてほしいかを丁寧に説明し、実践を通して伝えている。例えば、次にあげる内容は、若干のニュアンスの違いはあれ毎年伝えてきた。

- ・初期の英語学習は「聞くこと」→「話すこと」→「読むこと」→「書くこと」の順序が大切である。
- ・四輪駆動仮説(筑波大学附属中学校, 2002) : 英語力を上達させるためには、「授業」「家庭学習」「授業以外での良質なinput」「英語を使った独自の楽しみ」の4つの要素と、それらが相補関係にあることが重要である。
- ・できるようになるまで繰り返し練習すること、そのために授業内外で英語を使うチャンスを逃さないこと、家庭でも十分に「復習」することが大切である。
- ・音読は「話すこと」の練習であり、場面や状況、心情などが正確に伝わるような英語で音読できるようになることを目指す。

また、中学1年生の最初から新出の文法や表現を導入する際には、その表現が実際に使われる場面を大切にしながら、生徒との英語でのやり取りを通して、生徒に文法の意味、形式、機能を気づかせる帰納的な導入の方法をとっている。明示的な説明はなくとも、帰納的な文法の導入を通して意味や形式に気づこうとする姿勢や、教員や仲間と英語でやり取りすることで授業が成り立つという感覚は、こうした日々の授業を通して、生徒が自然と身に付けてきたものである。

仮にこうした「学習観」が共有できていない場合、教師も生徒もその位置づけや目的を意識しないまま課題やオンデマンド授業を提供／享受することとなり、それまでの学校での学習とは切り離された「その場しのぎ」の学習となりかねない。

②変わらない授業の流れと学習習慣の形成

本校の英語科の教員の授業は、アプローチの仕方は違えども、大きな流れは共通しているため、担当教員が変わったとしても生徒はほとんど違和感なく授業を受けることができる。本校で授業を1年以上受けてきた現2、3年生の多くは、活動の順序に慣れ親しんでいるとともに、個々の活動の目的も理解している。例えば、本校では文法項目であれ、題材であれ、新出事項を導入する際にはオーラル・イントロダクションを行っているが、オーラル・イントロダクションの段階で教科書を開く生徒の姿が見られないのは、生徒がこの活動の目的や活動時の約束事を理解しているためである。

また、教師の英語による質問には英語で答える、できる限り単語ではなく文で答える、音読の際には教科書を手に持って前に向かって声を発する、などの学習習慣も、どの教員の授業であっても日々の授業の中で繰り返し実践されている。特に教員の問いかけについては、「英語を使って自然にコミュニケーションをする貴重な機会」として、積極的に英語で答えるように促している。

決まった授業の流れや授業中の学習習慣が確立され、共有されている場合、通常とは異なる状況においても教員が「いつも通り」の指示を出すことで生徒も「いつも通りにやればよい」という安心感が生まれ、迷うことなく学習に取り組めることにつながる。また、教員にとっても「この指示を出せばいつも通り活動してくれるはず」「生徒はきっとここでこう反応してくれるはず」というように、生徒の実際の行動や反応をイメージしながら授業を組み立てたり、指示を出したりすることができるため、自信を持って教材を提供できる。

③日常的な学習サイクルの構築

1年生の初めには、毎回の授業の復習やNHKラジオ『基礎英語』の視聴など、その日に取り組んだ家庭学習の内容を毎日『家庭学習の記録』という専用用紙に記録させ、週に一度提出させる取り組みを実施してきた。こ

の実践を通して、生徒は「復習」の重要性と授業と家庭学習の相補的な関係を実感するとともに、毎日少しずつでも学習を続けるという語学学習において非常に重要な学習習慣を獲得することとなる。

また、教科書を用いた学習が始まる夏季休業前には、図2のような教科書を用いた家庭学習の方法を示し、授業内で実際にいくつかのステップを実施しながら家庭学習の指導を行った。こうした家庭学習に関する初期指導を経て、生徒は授業と家庭学習が相補的な関係になるような学習サイクルを少しずつ身に付けていく。

こうして身に付けた学習サイクルは、その後も継続すること、自身の状況や課題に応じて見直し、改善することが必要となってくる。本校では定期考査実施後や年度はじめなどの節目には、こうした学習サイクルがどの程度実践できていたか自己評価する機会を定期的に設けている。学び方を身に付け、それを継続し、必要があれば改善するといったことは、主体的に学ぶ上では欠かせない要素と言える。

通常とは異なる状況においても教科書を用いた学習を進めていくためには、生徒がこうした学習サイクルを身に付けているかどうかの一つの鍵となる。

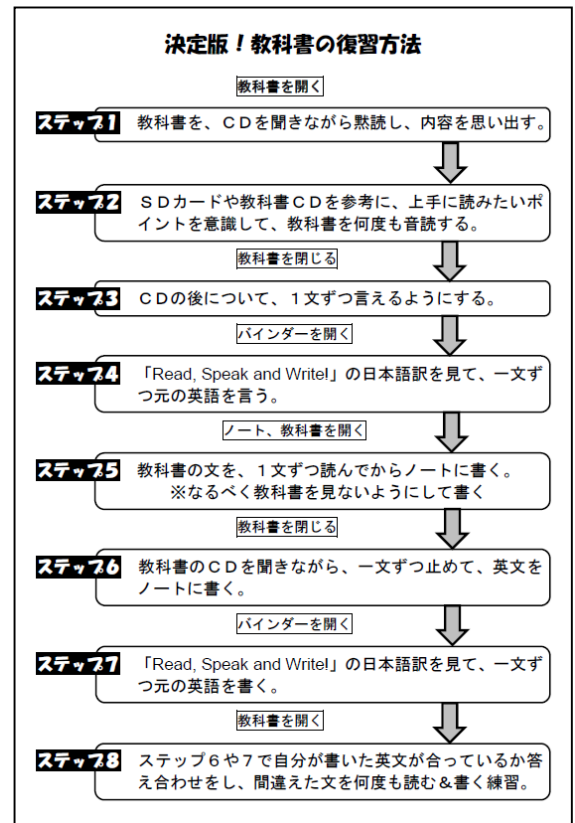


図2 家庭で行う教科書の復習方法

④長期休業を利用した学習計画の作成と学習記録による自己評価の実践

長期休業中は、生徒が主体的・計画的・継続的に家庭学習を行うことが求められる。そのため、1年生の夏休みから長期休業専用の学習記録用紙を用いて休業中の学習の目標と見通しを持たせるとともに、実際に実施した内容を毎日記録し自己評価させている。また、休み明けには休業中の学習の工夫を学級内で発表・共有し、友人の取り組みから学ぶ機会も設けている。

1年生のうちカレンダー式の記録用紙を用いて毎日の計画と実施内容を記入する方式を取ることが多いが、学年が上がるにつれて、各自で設定した課題に応じた学習方法を考え、その進捗と最終成果を記入するグリッド式の記録用紙を使うこともある。こうした取り組みを長期休業の度に行うことで、生徒は授業のない期間であっても主体的・計画的・継続的に学習を進める練習をしてきた。

学習支援クラウドを利用したオンデマンド授業を提供する環境が整うまでの2か月間は、長期休業に近い形での課題による学習が進められてきた。生徒にどのような課題や指示・助言を与えたらよいか、生徒がどのくらい計画性を持って学習を進められるか、等の判断は、まさにこれまでの長期休業での経験がものを言った。

⑤振り返りと自己分析による学びの機会

普段の授業では生徒一人一人にICレコーダーを配り、授業中の音読やチャットなど自身のパフォーマンスを録音する機会を作っている。生徒は授業内や家庭学習で各自の所有するSDカードに録音された自身の英語を聞き、客観的に分析することで常に改善に努める習慣を身に付けてきた。特に文字指導を行う前の音声のみによる1年生の授業では、授業の復習のほとんどをICレコーダーに録音したモデルと自身の英語との比較を通して行うため、本校の生徒は自身の英語を聞いて振り返ることへの抵抗感はほとんどない。

スピーチ等の発表活動を行った際にも必ずICレコーダーに録音させ、発表後に自身やALTの発言を全て書き起こし、その上から上手にできた点と改善点を青と赤のペンで記入させたり、他のクラスメイトの良かった点を書き出させたりして、自己分析と振り返りの機会を毎回作っている。学習支援クラウドを利用した自宅学習の際

は、多くの生徒がタブレット端末やスマートフォン、PCに接続できるマイクなどを所持しており、ICレコーダー等の特別な機器がなくともその場で簡単に録音できることが全生徒について確認できたため、日ごろ教室で行っている「録音→振り返り・自己分析」という作業も容易に指示、再現することができた。

また、録音以外の「振り返りと自己分析」の機会として、定期考査後には「テストノート」というテスト振り返り用のノートを作らせている。生徒は毎回ノートに問題用紙や解答用紙、模範解答等を貼り付け、解きなおしをし、重点となるいくつかの問題については、なぜそのような正答になるのかを解説する「問題分析」を行った上で、テスト勉強を含むそれまでの学習の振り返りを書くことになっている。こうした記録はポートフォリオとなり次回の考査に向けた学習に活かされている。次の活動に向けた「振り返り」の重要性は言うまでもないが、スピーチの振り返りやテストノート作成は詳細な分析と言語化が求められ、自分がわかる／できることと、わからない／できないことを正確に把握し、改善に向けた具体的な行動につなげることで、生徒にとって「学びに向かう力」を伸ばす重要な機会になっている。

⑥生徒理解、教師への信頼

普通の授業では、どの教師も教師と生徒、生徒同士の人間関係を大切にしている。授業を英語によるコミュニケーションの場とするためには、自分の力を思い切り出しきって発表できたり、安心して失敗したりできる教室環境が不可欠であり、そのためには教師による生徒理解、生徒による教師への信頼、そして生徒同士の人間関係が何よりも大切だからである。本校英語科では発表活動の際は基本的にクラスメイト全員の前で発表させ、学び合いの場とすることが多いが、その際特に力を入れているのは「良き聞き手」の育成である。「聞き手」を育てることで、発表者は安心して発表することができ、持っている力を存分に発揮したり、仲間と互いに高め合ったりできる学習環境を作ることにつながる。

また、教師と生徒の関係で言えば、今回は現2、3年生それぞれの学年の学級担任をしている教員が英語科の主担当を務めていたため、生徒の英語熟達度や授業に取り組む姿勢、家庭学習の実施状況などを把握できていた。また、普通の授業でどのような問いかけをすれば反応が返ってくるか、どのようなことに積極的に取り組むかなど、生徒の興味・関心がどこにあるかなどもある程度把握できていた。同様に、生徒もそれぞれの教師のキャラクターや、英語学習に対する考え方、普段から大切にしていることなどをよく理解しており、長々と説明をしなくてもある程度はこちらの意図を汲めるだけの関係は築けていた。通常通りの関わり方が難しいときこそ、それまでのこうした生徒と教員の関係性によって学習の質が大きく左右されるだろう。

次章では、本章で挙げた理念やこれまでの実践を拠りどころや前提としながら、実際にコロナ禍での学習指導でどのようなことを大切にし、どのような工夫を行ったのかについて紹介する。

5. コロナ禍での学習指導の実際

ここでは実際の指導を、(1)紙媒体による課題提示での学習指導、(2)学習支援クラウドを使った学習指導、(3)分散登校による対面授業、の3つの時期に分け、本校としてどのような思いで、どのような英語の授業を行ってきたか振り返ってみたい。

(1) 紙媒体による課題提示での学習指導(2・3年生は3月～5月第2週、1年生は4月～5月第2週)

突然の休校は、家庭学習で何をさせたらよいのかをじっくりと考える間もなくスタートした。とりあえず紙媒体の課題を配付して自学をさせる、という状況が続いた学校現場が多かったのではないだろうか。「紙媒体の課題」といえば、並べ替え問題や書き換え、長文読解等の問題練習が並んでいるプリントがまず目に浮かぶ。もちろん、既習事項の復習や基礎固めには必要な課題である。しかし、そのような課題だけを長期間に渡って定期的に与えているだけでは、主体的に英語を学ぶ姿勢を育てるところか英語嫌いを増やすのではないか、という懸念が拭えない。特に、入学したての1年生は、小学校で英語を学習してきたとはいえ、突然「文字を練習しよ

う」とノートを一冊渡されたら、げんなりしてしまう姿が目浮かぶ。

本校でも、対面ではもちろんのこと、学習支援クラウドを用いてのオンライン英語授業も全く行うことができなかったこの時期、今まで実践してきた「聞くこと」「話すこと」を中心とした授業に代わる指導を「紙媒体でどのように展開していくか」を模索することが、チャレンジのスタートであった。4. で述べたような本校の英語指導の理念を大切にしつつ、今まで変わらずに行ってきた実践を最大限活かした学習指導を、紙媒体を通してどのように行ったのか、学年ごとに具体例とともに紹介する。

① 1年生

課題①：『We Can!』を使った小学校英語の復習(英文再生)

『We Can!』の中のポイントとなる文の日本語訳を見て、英文を思い出して声に出して言う。その際に4段階の自己評価を行う。この活動を、日を変えて5回以上行う。

課題②：『基礎英語1』を使った練習(英文再生)

『基礎英語1』を毎日聴く。聴き終わった後、その日のレッスンのポイントとなる文の日本語訳を見て、英文を思い出して声に出して言う。その際に4段階の自己評価を行う。この活動を、日を変えて5回以上行う。

課題①と②ともに解答も付けることで、自分で理解度をチェックできるようになっている。また、正しい練習をさせるために以下の注意書きも添えた。

- ・英文を書く練習をする必要はない
- ・場面や意味を思い浮かべながら言うようにする
- ・同じ日に何度もやるよりも、日を変えてやる

上記以外に、担当教員の自己紹介、生徒や保護者が疑問や不安に思うと予想される事柄への説明や、毎年入門期で伝えてきた本校の英語学習観等を仔細に掲載した英語科通信を発行することで、英語学習に対する不安をできるだけ払拭し、家にいながらも主体的に学習する姿勢を少しでも身に付けられるよう工夫した。さらに、「家でもできる『プチ英語学習』」と題して、英語の歌や映画、また基礎英語以外のテレビやラジオの英語番組を紹介し、少しでも英語に触れられるよう、情報提供をした。**(資料1, 資料2参照)**

② 2年生

課題① Writing Task(読む→書くというプロセスを中心としたライティング課題)

他社の教科書の読み物教材や、教師自身が書き下ろした文を読んだ上で、質問に答える形で自分について書く、オリジナルのイラストを使用した四コマ漫画のセリフを考える、絵を描写する等、全部で12個のタスクに取り組む。春休み明けからゴールデンウィークまでの約一ヶ月で、週に3つ行う計算で全部で12個のタスクを課した。**(資料3参照)**

課題② 1年生の教科書の復習

4. ③で示したように、教科書を用いた家庭学習の方法を示し、自分自身で復習を行う習慣ができあがっているため、1年生の教科書の中で自分が必要と感じる箇所を8 stepsに従って再度復習をするよう促した。

課題③ 教科書準拠問題集(全員に配付)

中1の復習ページを行う。

課題④ 『基礎英語 2』の聴取

毎日『基礎英語 2』を聴き、ポイントとなる文を復習して「家庭学習の記録」に記入する。

課題⑤ 家庭学習の記録

日々の学習内容と、そこから学んだことを専用用紙に記入する。

上記以外に、2年生初期のレベルもしくは少し上のレベルの英語に触れることのできるラジオ番組やテレビ番組、インターネットのサイトを紹介した。これらは必須とはせず、個々の興味や関心に応じて楽しんで行うよう促した。2年生では、既習の語彙や文法、表現を使って「自分自身で表現してみる」ということに重点を置き、そのための基礎固めができる課題を用意した。また、今後より長い英文を読むことのできる力を養うこと、また本校の課題であるライティングの力を伸ばしたいという意図も反映させた。

③ 3年生

課題① 英語上達日記(学習計画・記録表)

日々の英語学習の計画と記録を記入する。その際、「学習習慣を崩したくない」「復習に力を入れたい」「耳を鍛えたい」「英語を読むことを鍛えたい」等の目的別に学習方法や教材が示されたプリントを参考に、自分の英語力や興味に合った方法や内容を決めるようにする。(資料4, 資料5参照)

課題② NHKラジオ講座の聴取

『基礎英語 3』を毎日聞く。また、それ以外に自分に合ったラジオ講座をもう1つ選んで聞く。

課題③ 教科書準拠問題集(全員に配付)

中1, 中2の復習ページを行う。

これまでの2年間の指導を踏まえて、一律でやらせる課題は最小限とし、「学習計画・記録表」を活用することで、個々の生徒が自身の興味や課題に応じて主体的に学習を進めるよう促した。課題を出す際に気をつけたことは以下の3点である。

- ・生徒自身で学習計画を立てること
- ・生徒が方法と効果を十分に理解し、これまでも繰り返し行ってきた学習を核とすること
- ・あくまで「復習」と「自主的・発展的な学習」に焦点を当てること

「自主的・発展的な学習」としては、『基礎英語 3』以外のNHK語学講座を1つ選んで視聴することや、CNN10, TED Talks, 各社のGraded Readersなどを紹介することで、生徒の興味とレベルに応じて内容を選択し、英語に触れる機会を増やせるようにした。ただし、これらは必須の課題とはしなかった。

(2) 学習支援クラウドを使った学習指導(5月第3週～6月)※6月は対面授業との併用

『中学校学習指導要領解説 外国語編』に「授業は英語で行うことを基本とする」とうたわれているように、英語で授業を行っていくことの重要性が再認識されている。そのねらいは「『英語に触れる機会』を最大限確保すること」と「授業全体を英語を使った『実際のコミュニケーションの場面』とすること」である。学習支援クラウドを活用しての学習指導であっても、1時間1時間が生徒たちの成長にとって貴重な英語の「授業」であり、「英語の授業は英語で」という大原則を踏襲して、普段の授業同様に「豊富で良質なインプットを最大限与えること」や「生徒が実際に英語を使う場を豊富に提供すること」が、私たち英語教師の役割である。休校中で生徒の顔を見て指導できない中でも、「生徒に何をしてほしいのか」「どのような力を身に付けてほしいのか」とい

う、生徒の姿を思い描きながら指導することを心がけた。同時に「学習支援クラウドを活用しているからこそできること」もあるはずだ、という視点に立って指導を展開した。その上で、意識したことは以下の4つである。全て**4.**で述べた理念と重なることであり、英語科として常に共通理念を持って指導に当たっていることが、ここでも大きな支えとなった。

- ①教師も生徒も見通しを持つこと
- ②学習指導を帰納的に展開すること
- ③音声重視し、英語の使用場面も意識した指導を行うこと
- ④インタラクティブに展開すること

① 教師も生徒も見通しを持つこと

オンデマンド形式では、通常の授業のように生徒の様子がリアルタイムで把握できず、教師側の意図が伝わっているかどうか確かめようがなく、その場で指示を出すこともできない。生徒も、教師に確認したり、クラスメイトの様子を窺ったりしながら学習を進めることができず、自分がしっかりと学習できているか不安になりやすい。何をやるのかわからないという不安要素を少しでも取り除くために、本校では全教科が約一ヶ月ごとに指導計画を作成し、ホームページを通して公開した。学習指導の計画はもちろんのこと、課題の意図、それらに取り組むことでどんな力がつくのか等も明記されており、目的を理解した上で生徒が主体的に学習に取り組むことができた。さらに、生徒が自分で学習計画を立てるのにも大いに役立った。普段、忙しさにかまけて、疎かになりがちな指導計画だが、発信する側の教師も受信する側の生徒も、見通しや明確な目的を持つことができ、この非常事態においても、質の高い学習指導を継続することができたのではないかと思う。**(資料6参照)**

また、本校の英語学習に見通しをもって臨むことが難しい1年生の指導では、実際の学習指導に入る前に、以下の項目を指導内容に組み込み、生徒の学習意欲を高め、安心して課題に取り組むことのできる環境を整えた。

- 「英語学習の目的」…生徒に考えさせながら、本校の目指す英語学習の姿を解説
- 「英語学習の方法」…英語学習を効果的に行うためのポイントの説明
- 「教員自己紹介」…授業担当者の英語による自己紹介とその内容確認

② 学習指導を帰納的に展開すること

そもそも同時双方向ではないオンデマンド形式の学習支援であっても、教師が一方向的に、そして「演繹的」に知識を教え込むのではなく、目標となる新出文法事項、表現の意味や使い方を生徒が英語で聞いて想像力を働かせたり、自分自身の気づきを大切にしたりしながら理解・定着、さらにその先の活用につなげられる「帰納的」な展開を目指した。「英語の授業は英語で」を柱とし、それでもきちんとした理解を促すために、「形と意味」「使用場面や機能の説明」には日本語も活用した。さらに、生徒の理解度をリアルタイムで把握できず、理解度に応じた追加説明もできないこと、そして1年生においては、本校での英語学習が全くの初めてであるという状況であったため、通常の授業よりも細かい指示を日本語で出した。さらに、授業でどんなことが行われるかということ事前に日本語で示すようにした。そのような柔軟な対応も含めつつ、本校で行っている普段通りの授業を、「できる限り再現する」ことを試みた。それによって、生徒も安心して取り組むことができたのではないかとと思われる。

③ 「聞くこと」「話すこと」を中心に音声を重視した指導を行うこと

言語習得過程で「聞く→話す→読む→書く」の段階を経ることが重要であることは、本校のこれまでの実践からも自信を持って言えることであり、「変わらないこと」である。「聞くこと」「話すこと」の音声を重視した授業を行ってきた本校英語科としては、クラウドでの学習指導であっても、このことにこだわって指導を展開し

た。例を以下に示す。

ア) 「NHK テレビ講座」ならぬ「TKB ビデオ講座」を作成

1年生の「入門期」で行う音声での指導内容(以下の3つ)を番組のコーナー風のビデオにして配信した。

i) 「表現の学習」…be 動詞, 一般動詞のごく簡単な表現の導入と練習

ii) 「語彙の学習」…表現の幅を広げるための語彙の導入と練習

iii) 「文字の学習」…アルファベットの名前と音や歴史等の学習

文字の名前と音を扱った後, 「綴りと発音」(読むこと), さらに「単語や文の書き方」(書くこと)へと進めていった。また, NHKの『基礎英語1』を聴かせているので, 「基礎英語の復習」というコーナーも設けた。

イ) オーラル・イントロダクションのオリジナルスキットを作成

新出文法や表現の導入の際には, 形と意味だけでなく, 文脈や使用場面を意識した目標文を何度も聞かせられるよう, オーラル・イントロダクションをオリジナルのスキット動画にしたものを配信した。また, 教科書本文の導入の際も, 本文内容を教師が語ったり, スキットにしたりした動画を作成して配信することにより, 最初から一方的な日本語での解説をせずとも, 新出の表現や教科書の世界観を生徒が英語で, そして自分との関連の中で捉えられるようにした。通常授業だと教師一人が生徒とやりとりをする中で作り出す「場面」ではあるが, ビデオでは他の教師が出演し, その「場面」を再現することで, より現実に近づき, 生徒の興味を喚起する動画を作成することができた。**(資料7参照)**

ウ) 通常授業での発音・音読練習の再現

新出単語の発音練習, 教科書本文の音読練習は, 通常授業で行っている練習を再現した音声を配信し, 個人で練習できるようにした。また, ロールプレイの動画を作成し, バーチャルではあるが, 教師と生徒が一对一で役割を演じながら会話練習ができるようにした。

エ) 学習支援クラウド「ロイロノート」の利点を活かした指導

本校が使用している「ロイロノート」では, 生徒自身が発話したものを録音し, 教師に提出することが可能である。そのため, 学習内容を終了した後の発展的なリテリング活動やスピーキング活動は, 生徒に音声を録音させたものをクラウド上に提出させ, それに対して個々にフィードバックをした。

オ) 様々な英語に触れる機会の確保

発展的な活動として, 教科書のCDや英語教師の英語以外に触れる機会を持たせた。例えば, ALTに協力してもらい生徒へのメッセージや会話を配信したり, また教科書に出てくる *The Tale of Peter Rabbit* の文章をイギリス在住の知人に朗読してもらい配信したりすることで, イングランドの絵本をブリティッシュイングリッシュで聞くという機会を与えた。さらには, アメリカ在住の同年代の子どもたちが, コロナ禍の中でどのような日常生活を送っているのかをインタビューする, という動画を配信することで, 同年代の子どもたちの英語を聞く機会を得るだけでなく, コロナ禍の他国の小中学生事情を知るよい機会となった。

④ インタラクティブな授業を展開すること

「授業全体を英語を使った『実際のコミュニケーションの場面』』とするために, 「理解する」「表現する」といった一方向ではなく, 「伝え合う」という双方向のコミュニケーションが重要視され, インタラクティブな授業展開が必須であるとされている。ア)でも述べたように, 本校が行っていたようなオンデマンド型の場合は, 教師からの一方通行になってしまう傾向にあり, インタラクティブな授業は不可能なように思われた。しかし, 思わず発話してしまいたくなるような工夫やインプットの場面でじっと耳を傾けてしまいたくなるような工夫を

することで、仮想ではあるものの、インタラクティブな授業づくりを目指した。例を以下に示す。

ア) 「間」へのこだわり

新出文法事項や教科書本文導入のオーラル・イントロダクション、教科書本文の復習では、スキット以外にも、通常授業のように目の前に生徒がいることを想定して教師が語りかけているような動画を作成した。このことにより、語りを聞いていると問いかけに自然と答えたり、新出単語と一緒に発音したくなったりするような雰囲気づくりに努めた。この動画では、生徒が教師の問いかけに英語で反応できるよう適度に「間」を作った。これまでの授業での積み重ねがあるので、スクリーンの向こうで反応している生徒の様子が目に浮かぶのだが、そうは言っても実際に確かめようがないので、必ず声に出して反応することを指示した上で動画を見るよう徹底した。日本語での文法解説も同様で、オーラル・イントロダクションを通しての生徒の気づきを確認するための発話を中心に組み立て、生徒が自分なりに声に出して答えるための「間」を、あえて作った。

イ) 質問箱や Zoom での質問教室の開催

オンデマンド形式での授業の弱点を補うために、学習支援クラウド上に質問箱を設置したり、教科ごとに時間を決めて Zoom による質問教室を開くなど、わからないことを質問できる機会を作り、生徒の不安を解消できるように努めた。

ウ) なんちゃって Q&A 活動

ALT が問いかけ、生徒が答える、生徒が問いかけて ALT が答えることで、英語で会話をしている気分をバーチャルに味わえる「なんちゃって Q&A 活動」を行うことができる動画を作成し、授業のウォームアップ等に組み込むことで、生徒がより能動的に授業に関わることができるよう工夫した。ALT がする質問や、返答がそのまま生徒への自然で良質なインプットとなるという利点もあった。また、ダイアログ形式の教科書本文の役割練習においては、教師が動画の中で登場人物になりきり、音読練習後には生徒がなりきって教科書の会話を発話してみろという機会も与えた。

(3) 分散登校による対面授業(6月～7月)※6月は学習支援クラウドを活用した指導と併用

6月以降分散登校がスタートし、対面の授業がようやく始まった。しかし、通常通りの授業を行うことはできず、たくさんの制約の中での授業となった。まず、授業が1クラス週1時間のみであったため、通常授業のように指導内容を進めていくには無理があった。また、教師も生徒もマスク着用であり、口元が全く見えない中での授業、そして分散登校が始まってすぐの段階では、大きな声で発音することも、生徒を向かい合わせて対話をさせることもできなかった。このように限られた中で、しかも「教室で行う意義がある授業」を展開する必要に迫られた。

まず、授業を組み立てる時点で目指したのは、以下の2点である。

- ・「オンラインの学習支援クラウドでできること」と「対面授業でしかできないこと」をはっきりと分け、後者に絞って授業を行うこと。
- ・学習支援クラウドでの学びと対面授業での学びに繋がりを持たせ、積み重ねていくことの大切さを生徒が実感できるようにすること。

上述した指導計画には、オンラインの学習支援クラウドでは何を学び、対面授業では何をするのかということを示し、教師も生徒も見通しを持てるようにした。**(資料8参照)**

実際の対面授業では、学習支援クラウドで個々に学んできたことの確認を行い、教師がフィードバックを行う

ということが中心であった。具体的には、

- ・生徒に目標文を言わせたり、教科書本文に関する質問をして生徒に答えさせたりすること。
- ・学習支援クラウドで配信した動画に繋がる動画を見せ、その動画について Q&A 形式でやりとりを行うこと。
- ・意見が分かれそうな内容の教材を用意し、クラスメイトと考えを共有する場面を作ること。

そこで、生徒がどのくらい理解し、身に付けられたのかを把握し、再度復習すべきポイントをオンラインの学習支援クラウドで示す等、対面での授業と学習支援クラウドでの学習との連携を図った。

また、「マスクで口元が見えない」「大きな声で発音させない」「生徒同士の対話は控える」といった制限があった場合の対応としては、以下のような工夫を行った。

- ・口元を見せたいときには、その時のみマスクをはずし、無音で口の形を見せた。
- ・きちんと英語を聴かせたい場面では、学習支援クラウドで配信した動画も含めた動画を活用した。
- ・ノートに書いて表現する場面を増やした。

6. 成果と課題

ここまで臨時休校中の課題学習及びロイロノート・スクールによる遠隔学習指導、分散登校中の対面授業及び遠隔学習指導の併用指導について詳細を述べてきた。その中ですでに成果と思われることや課題と思われることが示されているが、ここで改めてそれらについてまとめておくことにする。

(1) 成果と思われること

① 英語科指導における大切なことの明確化

平常とは異なる特殊な状況下での指導を行う中で、英語科指導において大切にしたいことが改めて明確になったように感じられる。それらは主に次のようにまとめられるであろう。

ア) 全教員が指導理念を共有していること

遠隔学習指導では、アップロードする教材は学年毎に複数の教員が制作に携わったが、平素から全教員が指導理念を共有していたため、それらを制作するにあたって各学年の指導内容及び学年を越えた指導内容の調整をするのが簡単であった。例えば、音声を重視した活動にすること、場面設定を重視した帰納的導入を目指すこと、擬似的インタラクションを取り入れた言語活動を行うこと、等である。結果的にできあがった教材は、どの学年のものも今後再び使う機会があれば使ってみたいと思わせるものになった。

イ) ルーティーンが徹底されていること

プリント等による課題やロイロノートによる遠隔学習指導では、教材をどのように利用するかは生徒に委ねられていた。しかし、平素の授業のルーティーン活動から英語科が何を重視して指導しているかを生徒が理解しているため、ア)で示したような指導理念に基づいた学習内容を生徒はしっかりと履行してくれた。ただし、本校英語科の授業をまったく受けた経験のない1年生だけはそう簡単にはいかないことが予想されたので、第1回の指導で「英語学習の目的」、「英語学習の方法」という教材を設けて本校英語科の指導スタンスを説明したり、毎回の授業の各活動でも活動目的や活動方法を丁寧に説明したりした上で取り組ませるようにした。

② 英語科の協力態勢の再確認

①の内容にも関係することであるが、今回の特殊な状況下における学習指導では英語科教員全員の協力態勢が整っていることの重要性を改めて実感した。特に、ロイロノートによる遠隔学習指導の教材作成においては、それが無かったら今回のようなものは実現できなかったであろう。在宅勤務日はおろか週末の休日まで費やして教材を作成することになった実態を英語科では「ロイロ地獄」と呼んだが(「ロイローゼ」と呼んでいた学校もある)、各教員がバラバラに取り組んでいたら、けっして成し得なかった教材作成であったと思われる。

各学年にはその学年の主担当の教員がいるが、その教員だけで作成したという教材はない。すべての教材を学

年の主担当と副担当が協力して作成し、特に1年生では毎回4人の常勤教員が全員で教材作成にあたった。また、平素であれば単独で行われる非常勤講師の授業も彼らに任せきりにすることはなく、学年として作成する各回の授業制作に協力する形で参加してもらった。一方、2名のALTと共にを行うティーム・ティーチングは前期は3年生で週1回行われることになっているので、ネイティブ・スピーカーの特徴を生かせる活動で3年生の授業に登場してもらった。なお、6月の分散登校まで非常勤講師(ALTを含む)は基本的に在宅勤務としてもらったため、教材作成には主にリモートで参加してもらった(Zoomで参加してもらったものを録画・編集した)。そして、彼らも教材作成にいろいろなアイデアを出してくれた。

また、上記のような協力態勢は実際の教材作成を支える事前の準備でも見られた。それは各学年の「指導・評価計画」(資料6・8参照)、週毎の「教材作成計画」(資料7参照)に現れている。これらを見ていただければ、臨時休校中の課題や遠隔学習指導の教材、分散登校中の対面授業及び自主学習の課題等がきちんと計画的・系統的に作成されて生徒に提供されていたことを理解していただけるであろう。

以上のことから、充実した学習指導を行うためには、教科の教員間に指導観や指導内容に対するコンセンサスがあることと、それを実現できる協力態勢があることが必要である。これはどのような条件下であっても同じであるが、特に今回のような特殊な状況下では欠かせないものであることがわかった。そして、何よりもそれを可能にするための教科内の良好な人間関係作りが大切であることを強調しておきたい。

(2) 課題と思われること

① オンデマンド授業の限界

今回本校が採用した「ロイロノート・スクール」は、元々は遠隔学習指導を想定したものではなく、教室でインターネットを用いて個々の生徒が仲間と情報共有をしながら学習を進めるためのシステムである。したがって、これを遠隔学習指導で利用する場合は、リアルタイムではなく個々の生徒の都合に合わせたオンデマンド授業となる。英語科が作成した“教材”は英語科が目指す指導を行えるようにすべてビデオ教材とし、言うなれば「テレビ英語講座」のようなものであったが、その中でいくら音声を中心にした活動や擬似的なコミュニケーション活動を仕組んだとしても、そこには自ずと限界があった。

ア)リアルタイムのやりとりの欠如

生徒側からすると、教師の指示に従って作業や活動をすることはできるが、自分の作業や活動がどの程度のものであるのかの評価と指導を受けられないという弱点がある。教師側からすると、生徒のリアルタイムの反応がわからず、提出された課題に対する評価をリアルタイムでフィードバックすることができない。

イ)生徒同士の学び合いの不足

平素の授業であれば、生徒は生徒同士で学び合っている。例えば、他の生徒の意見や答え等を聞いて自分のそれらを修正したりすることで学習の深化・補充を行っている。また、特に英語科ではペアやグループで言語活動を行うことで初めて実践的なコミュニケーション活動を行うことができる。しかし、ロイロノートによるオンデマンド授業ではこのようなことができない(もちろん、提出された課題を共有するという機能はあるが、それを全員が同時に見て議論するということは難しい)。結果的に生徒同士の学び合いの機会を保障することができなかった。

② 学習の二極化

Zoom等によるオンライン授業が一部であるが全国で行われるようになってから、世間一般で「学習の二極化」が騒がれるようになった。この場合の二極化は、主にオンライン授業を受けられるかどうかのちがいに由来したものであるが、全生徒がオンライン授業を受講できる環境の整っている本校では、少しちがったレベルでの二極化が起こったことが判明している。

臨時休校中の自学自習と遠隔学習指導及び分散登校中の時間差通学・短縮授業では、多くの生徒(平常時は不登校気味の生徒も含む)が主体的に課題学習に取り組んだが、日を迫うごとに課題に取り組めなくなる生徒が増えていった(英語科では毎時または毎週「受講レポート」を提出させて学習状況を把握し指導していた)。その結果

は7月末に行われた「確認テスト」に現れ、特に2年生でそれがはっきりと現れた。3年生と1年生にも同様の傾向は見られたが、2年生に比べると小さかった。おそらくそれは、3年生は過去2年間の指導によって自学自習ができるようになっていたことや、1年生は入学したばかりで学習意欲にそれほど差がなく、かつ学習内容がまだそれほど高度なものになっていなかったためと思われる。

この二極化は、家庭での学習の成否が生徒の学習を継続しようとする意思に大きく左右されることを物語っている。つまり、①学習意欲が高く、②自分の生活を自分でコントロールでき、③地道に取り組むことができる、生徒には都合のよいシステムであるが、①～③のどれかまたは複数が弱い生徒は主体的な学習が継続できないシステムである。平常の対面授業であれば、教師がそれらの弱点を補う指導を効果的に行うことができるが、家庭での学習ではそれが難しい。結果的に、学習に付いて来ることができない生徒を置き去りにしてしまう可能性が平常時の授業より高くなるわけである。

以上のような課題の分析により、次に分散登校を行わなければならない状況になった場合は、半数の生徒が対面授業を受け、残りの半数の生徒がその授業に Zoom で参加しながら在宅学習を受けるといった形を採ることになった。これであれば、少なくとも課題①のアとイは多少解消できるはずである。また、課題②も教師がコントロールする範囲が広がるので、生徒間の習熟度の差は狭くなると期待される。幸い、現時点まではこの指導体制を採ることはなかったが、今後いつまた分散登校あるいは臨時休校が行われることになるのかは余談を許さないで、その時に備えた指導方法と指導内容の検討が必要であろう。

7. まとめ

ここまでの議論を改めて見直してみると、本校英語科が大切にしている「変わらないこと」は、新学習指導要領の改訂のポイントの根幹をなすものと重なる部分が大いように思われる。それは、「変わらないこと」として英語科の全教員が共有している指導(学習)観が、新学習指導要領の「育成を目指す資質・能力の三つの柱」の育成に大きく関連しているからである。

まず、「聞くこと」「話すこと」を重視したスパイラルな学習指導は、生徒が小さなステップを踏みながら「知識・技能」を着実に身に付けられることを可能にしている。例えば、英語の発音や発音とつづりに関するルールを基本から学ぶことによって、英語そのものに対する知識や英語を正確に聞き取ったり表現したりする技能を身に付けることができている。そして、学習したばかりの表現だけでなく、既習事項を繰り返し使って行うコミュニケーション活動等を授業中に系統的・計画的に実施することで、生徒は複数の技能を統合的に使ってコミュニケーションすることができる技能を身に付けている。

次に、オーラル・イントロダクションなどの帰納的な流れを重視した指導過程は、生徒の「思考力・判断力・表現力等」を育成することに貢献している。それは教師が生徒に演繹的に教え込むよりも、大切なことを気づかせる指導を行う方が、生徒に思考・判断・表現する機会を多く与えられるからである。これは本校英語科の授業の真骨頂が現れている部分でもあり、教師と生徒及び生徒同士が活発にことばを交わしながら学習を進めていく姿を3年間を通して見ることができる。

そして、生徒の主体的な学びを重視することは、「学びに向かう力・人間性等」に通じている。本校では常に生徒に英語を学ぶ意味を考えさせた上で学習活動に取り組みせており、また自分で考えたことを発表したり生徒同士で話したりする機会を数多く与えている。そうした活動をとおして生徒は自らの意志で英語学習に取り組むようになるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けているのである。

以上のことは、本校にとっては決して新しいことではなく、本校が長年大切にしてきた「変わらないこと」であるが、それらはどのような状況下であっても生徒の主体的な学びを支える「変わらないこと」でもある。そして、それは結果的には新学習指導要領の「育成を目指す資質・能力の三つの柱」と重なるものであり、最終的には「生きる力」を育てていくものであると言えるであろう。

参考文献

肥沼則明(2018)「目から鱗が落ちる英語学習 Nory's NO worRIEs on English Learning」〈<https://norys-noworries.jimdofree.com/>〉

肥沼則明(2019)「次世代を担う先生方のための英語学習指導 Nory's Junior High School English Teaching」〈<https://norysjhsenglishteaching.jimdofree.com/>〉

筑波大学附属中学校(2002, 2017-2019)『筑波大学附属中学校研究協議会発表要項』第30, 45-47回

東京高等師範学校附属中学校(1910)『教授細目』

文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』